

# 東京アマデウス合唱団 ミニコンサート

12年間ご指導頂いた齋藤明生先生を追悼して

*Tokyo Amadeus Chorus*

20007/22(土)

同仁キリスト教会礼拝堂

---

## ご 挨拶

今宵は、お忙しい中をご来場いただき、団員一同厚くお礼申し上げます。

東京アマデウス合唱団は、1980年の創立以来、モーツァルトのほか古典派の作品を中心にほぼ毎年1回の定期演奏会を行ってまいりました。

今年で20周年を迎えましたが、昨年まで12年間も当合唱団の指揮・指導をお願いしておりました「齋藤明生先生」が、本年1月急逝されたことから、齋藤先生を偲ぶ追悼のミニ・コンサートを開催する運びとなりました。

本日は、従来から当合唱団の常任伴奏者でありました「水野克彦先生」を新指導者にお迎えし、第6回・第8回の定期演奏会でも演奏したことのあるH. L. ハスラーのMissa secundaと、メンデルスゾーンのAus tiefer Noth schrei' ich zu dir等、昨年並みの小人数を考慮したアカペラに、大島博先生のテノールソロを加えて、追悼にふさわしいミニ・コンサートとなりました。

毎回続けてご来場を頂いております方々に支えられ、特に今回は、齋藤先生のご遺族からの多額のご寄付を頂き、また本日ご来場の皆様方からの暖かいご支援を頂いたお陰でこのコンサートを開催することができますことを、団員一同心から感謝いたしております。

演奏会の費用や人員と練習時間の確保には、相変わらず苦労しておりますが、指導者の熱意と団員皆の努力により、本日の本番を迎えることができることとなり、団員の一人一人が精一杯力を出し切って今回の演奏会を成功させたいと思っております。

本日は、暖かいご声援と共に演奏をゆっくりお楽しみ下さい。

2000年7月22日

東京アマデウス合唱団  
団 長 柿 沼 哲

---

~~~~~ The Program ~~~~~

第1ステージ.....

1. ゴットフリート アウグスト ホミリウス  
Gottfried August Homilius (1714-1785)

合唱

- ・我がイエスよ、もし今君逝かせ給はば  
So gehst du nun, mein Jesu, hin

2. ヨーハン ゼバスティアン バッハ  
Johann Sebastian Bach (1685-1750)

テノールソロ

(シエメツリ歌曲集より)

- ・ああ我が命の今際の時が  
Ach daß nicht die letzte Stunde (BWV439)  
・神よ、汝の優しき御意の何と寛き事か  
Gott, wie gross ist deine Güte (BWV462)  
・来たれ、快き死よ  
Komm, süsser Tod (BWV478)

3. ハンス レオ ハスラー  
Hans Leo Haßler (1564-1612)

合唱

・第2のミサ

- |               |           |               |
|---------------|-----------|---------------|
| Missa secunda | 1. Kyrie  | 4. Sanctus    |
|               | 2. Gloria | 5. Benedictus |
|               | 3. Credo  | 6. Agnus Dei  |

第2ステージ.....

4. フェーリクス メンデルスゾーン バルトールディ  
Felix Mendelssohn Bartholdy (1809-1847)

合唱

モテット

- ・主よ、今こそ汝のしもべを安らかに去らせ給ふ  
Herr, nun lässest du deinen  
Diener in Frieden fahren (op. 69 Nr. 1)

合唱とテノールソロ

- ・深き淵よりわれ汝に呼ばふ  
Aus tiefer Noth schrei' ich zu dir (op. 23 Nr. 1)
- |                   |           |
|-------------------|-----------|
| I Choral          | IV Choral |
| II Fuge           | V Choral  |
| III Arie mit Chor |           |





## § 今回の演奏曲目について §

---

長年にわたってこの合唱団を指導され、キリスト教声楽曲のソリストとして数多くの演奏会で活躍された齋藤明生氏を追悼するために、今回はドイツ・プロテスタントの流れから、「死と永遠」をテーマとしたプログラムを組みました。この合唱団の主要レパートリーであるA. Mozartの《Requiem》を考えるよりも、J. S. Bachを歌い続けて来られた齋藤氏を追悼するのに、この方がふさわしいと思われるからです。

### 第1ステージ

最初は、18世紀後半の最も重要なドイツ・プロテスタント教会の作曲家G. A. Homiliusが1784年に発表したカンタータ《So gehst du nun, mein Jesu, hin》です。実は、1764年に受難音楽『マルコ受難物語』のなかに入れられたものが原曲です。Homiliusはザクセン選帝侯国のルター派の牧師の子として生まれ、Leipzig大学で法学を学ぶかわら音楽を志し、Johann Schneiderの生徒及び助手に成り、J. A. Hiller等の説ではJ. S. Bachからも作曲と鍵盤奏法を学んだと言われます。1755年5月からKreuzkircheの合唱指揮者兼オルガニストを勤め、やがてドレスデンの三つの主な教会の音楽監督に任命されましたが、1760年Kreuzkircheが七年戦争で破壊されてからはFrauenkircheに活動の中心を移し、その生涯の最後まで教会暦に合わせてカンタータの作曲を続けました。Bach亡きあとの教会カンタータに新しい命を与えた人物として高い評価を得ています。

演奏されるカンタータは、200曲を超える彼のカンタータ作品の一つで、ヨハネによる福音書11. 14-16でイエスが死んだラザロをよみがえらせるために「彼のところへいこう」と言われたのに対して、真意を理解できなかった弟子の一人ディディモと呼ばれるトマスが「わたしたちも行って一緒に死のうではないか」と言い出す部分を基礎にテキストが書かれており、ソプラノが自分のために十字架の苦難を受けられようとするキリストへの悲しみと、この主と「死」を共にしようとする殉教的な愛を歌うあいだ、ほかの三パートはリフレインのように、常にソプラノの歌詞と連繫を保ちながらトマスの言った言葉をフーガで繰り返し、終結部ではソプラノもそのリフレインに加わる構造になっています。ソプラノが定旋律として歌っているのは、神への死に打ち勝つ信頼を歌ったドイツ讚美歌《Was mein Gott will, gescheh allzeit》のメロディで、そのモノフォニックなコラール旋律と、伴奏風のポリフォニックなハーモニーを形成しながらもレチタティーヴォ風の表情豊かな展開を見せる他のパートとのシンメトリーは、この作曲家の多用した特徴のあるものです。

次は、テノールのソロによりHomiliusの師と目されているJ. S. Bachの宗教歌曲三曲です。いずれも1736年にGeorg Christian SchemelliがBreitkopfによって出版した『シェメリリ歌曲集』原題《Musicalishes Gesang-Buch, darinnen 954 geistreiche, sowohl alte als neue Lieder und Arien》からのBärenreiter社による抜粋曲集を使用しています。

《Ach daß nicht die letzte Stunde》BWV439は作詞E. Neumeister (1705年)で、定旋律は作者不明で、Bach作とされて来ましたが、彼は通奏低音と若干の編曲に関わっただけという見方が最近有力です。日本の讚美歌もそうですが、このような曲になると定旋律ぐらいは作詞者が自分で作曲

---



---

したり、過去に行われた旋律を借りて来たりすることが多いからです。歌詞の作者Neumeisterはルター派の牧師で、Bachの教会カンタータの作詞者としても重要な存在です。演奏される歌詞は抜粋ですが、死の恐怖に脅えながら、神への信頼によってそれを克服し、後半では罪を悔い、嫌悪する過去に訣別を告げ、却って生きながら自分の死を希求して、やがては「神の相続人」として復活し、天国へ導かれることを切望する内容になっています。

《Gott, wie Groß ist deine Güte》BWV462の作詞者はこの歌曲集の編集者Schemelli (1736年)で、彼はツァイツの町の合唱指揮者兼オルガニストでしたから、この場合も定旋律の作者はSchemelliである可能性が高いようです。神の恩寵と慈愛に感謝しつつ、後半では自分の生命が奪い去られようとするときに信仰の強さが現れるように、そして死の眠りから呼び覚まされて神の前に召し込まれるとき、裁かれて地獄に降されること無く、愛によって永遠の御国に入れていただけるようにという祈りが歌われています。

《Komm süßer Tod, komm selge Ruh!》BWV478は、作詞作曲者共無記名ですが、Arnold Scheringの研究によって、現在ではほぼ完全な意味でBachの真作と見なされている数少ない例の一つです。1724年ライプツィヒ時代の最初の頃の作品という説があります。この歌詞を聴くとき、《マタイ受難曲Matthäus-Passion》BWV244のバスが歌う57番アリアの《Komm süßer Kreuz》という言葉を出す人も多いでしょう。堪えがたい苦しみを覚える「死」や「十字架」についてBachが好んで用いるこの《süßer》こそ、彼の信仰を象徴する形容詞です。それは、例えばHändelの《Messiah》のなかの〈His yoke is easy, his burthen is light.〉と歌われる歌詞も究極的には「彼の荷」が「十字架」を指している訳ですが、それよりは遥かに直接的で強烈な、死苦を却って迎え入れようとする言葉です。死を絶対に避けることのできない運命の瀬戸際に立たされた魂が、死線の向こうにある「安息」と「天国」のみを意識下に置いて、ほかのすべてを消し去った、召される瞬間の境地が歌われていることに、私達は驚嘆せざるを得ません。

前半の最後はHans Leo Haßlerの《Missa secunda》です。本合唱団はすでに過去二度取り上げ、重要なレパートリーになっております。J. S. Bachよりも約1世紀前のこの作曲家は、ルターの伝記を書いたJohann Mattheusに学んだヌレンベルグの地位の高いオルガニストIsaak Hasslerの子として生まれ、プロテスタントの環境の中で育ちました。しかし、1586年1月、アウグスブルグのOctavian2世Fuggerの宮廷オルガニストに迎えられてから以後、1601年にヌレンベルグに戻るまでの間は、皇帝がカトリック教徒であったために、彼の宗教作品はすべてカトリック教会のために書かれました。1599年にヌレンベルグで出版されたこの作品も、そのような事情が成立の背景にあります。Haßlerは作曲家である前にオルガニストとして卓越した技術的才能を発揮した人物で、楽器に対する高い見識を持っていました。

このミサは《ハスラー全集Sämtliche Werke》のミサ曲の部のなかに収められたとき、「第2の」という付題がすでに原題にあったことを伝えています。この副題が典礼上何らかの意味を持つものではありません。〈Kyrie〉で呈示されたモチーフが、〈Credo〉の〈Crucifixus〉以下と〈Benedictus〉と〈Agnus Dei〉に繰り返し現れるのは、十字架に象徴される私達の罪の赦しを通じて啓示される「神の愛」を、このモチーフを重要な歌詞のところで繰り返し使うことによって

---



---

強調しなかったのでしょうか。聴く人の心に染み込むように聞こえてくるこの旋律は恩寵の優しさの表現ではないでしょうか。Haßlerの特徴と言われる「定旋律の模倣的な取り扱い方」、「模倣による朗読風の局面の展開」は、この作品全体にもよく見ることができます。このスタイルは当時としてはやや保守的な、1550年頃普通であったものですが、形式上のバランスのよさと上述のモチーフを重要なところに配することによって、全体として作品の訴えようとしているものが、聴き手に伝わって来るところに、この曲の価値があります。

## 第2ステージ

プログラムの後半は、Felix Mendelssohn Bartholdyの演奏される機会の少ない作品を二曲聴いていただきます。Felixの祖父である哲学者Mosesはユダヤ教徒でしたが、銀行家であった父Abrahamは人種的偏見を避けるために、1822年自分が改宗する6年前に子供達にプロテスタントの洗礼を受けさせました。洗礼証書を持っていれば、差別を受けなくて済むと考えたのです。父の改宗の動機は功利的な計算から出たものですが、このことがFelixの精神に大きな意味をもたらすことに成りました。Felixのプロテスタンティズムがどんなに信仰の強いものであったとしても、ユダヤ人の血を引くこの19世紀前半の最も才能に恵まれた逸材の音楽を、教会は決して快く迎えるようとはしなかったのです。したがって、彼の宗教作品は教会の礼拝に使用されることを前提にして生まれたものは少ないと見られています。

**モテット《Herr, nun lässest du deinen Diener in Frieden fahren》** op. 69Nr. 1は、1847年6月12日の日付が入っていて、同じ日付のある《Mein Herz erhebet》同Nr. 3とともに同じ機会の何らかの目的のために書かれたのかもしれない。カトリックのラテン語の聖歌《Nunc dimittis》（復活主日などの聖務日課の終課の讃歌）と《Magnificat》（晩課の讃歌）に対応します。この作品番号にはもう一曲、同じ年4月5日の日付のある《Jauchzet dem Herrn》同Nr. 2（復活祭後第三主日などに歌われる讃歌《Jubilate》に対応）が加えられていて、三つのモテットとして扱われています。歌詞はドイツ語版で演奏しますが、これらには英語の歌詞も付いていて、《The New Grove Dictionary of Music and Musicians》はこの三曲を《Three English Church Pieces》と表示しています。どちらが原版であるかは定かではありませんが、このドイツ語版はルター訳聖書やルター派の教会が使う聖務日課の晩課のテキストとも違い、終章の《Gloria Patri》も措辞が異なります。また、語法としても英語の歌詞の方が自然なので、或は英国教会のために原版は英語で書かれたのかもしれない。1847年6月、作曲者は生涯最後の年の身体の衰えを回復するためにドイツ南西部の温泉保養地バーデンバーデンで過ごしながらこの作品を書いたようです。前年イギリスに旅行してバーミンガムで大作オラトリオ《Elia》改訂版op. 70を初演した力はずでなく、死を予感したMendelssohnは、ルカによる福音書2:29-32に記されている、「主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない」というお告げを聖霊から受けていたシメオンが、幼子イエスを迎えて神をたたえて言う言葉がテキストになっているこの作品の作曲に、自分の特別な思いを託したようです。「主よ、今こそ汝の僕を安らかに去らせ給へ」の部分は常に重い静かなフーガで展開し、歌詞の後半は対照的に表情豊かなポリフォニーで歌われます。「異邦人の光」を鋭いフォルテで

---



---

表現するなど、ロマン派の世代に生きたMendelssohnらしい、古典的でありながら、表現の豊かさと響きを決して失わない彼の個性が感じられないでしょうか。同時代のR. Schumannとも共通することですが、Mendelssohnの音楽は、声楽曲はもちろん器楽曲でさえも詩を必要としていました。彼がピアノのために『無言歌集』を第8巻まで書いたのも、世俗歌曲や合唱曲の作品が多いのも、それを物語っています。そして、宗教声楽曲の分野においても、多くが詩編を素材にしています。

《Aus tiefer Noth schrei' ich zu dir》op. 23Nr. 1は、1830年《Ave Maria》《Mitten wir im Leben sind》とともに三曲の合唱曲をセットにして《Kirchen Musik》と題して出版しました。同年5月に21歳のMendelssohnはヴァイマルに若いときから心酔していた八十歳のGoetheを訪ね、彼の前でBeethovenの第5シンフォニーをピアノで弾いてみせたあと、イタリア旅行に出発しています。同じ頃アウグスブルグ信仰告白三百年記念のために、Mendelssohnも第5シンフォニー「宗教改革」の作曲に取りかかっていた。この詩編130. 1-8を基礎にした曲は、定旋律と歌詞は1524年にMartin Luhterが作詞作曲した詩編讃歌をそのまま使用したものです。この詩編はカトリックの葬儀の出棺の際などに読まれる《De Profundis》に相当するもので、プロテスタントでも告別や故人の記念に用いられることが多いものです。第1部のコラールと第2部フーガの部分が原曲歌詞の第1節、第3部のテノールのアリアの部分が第2節、続く合唱の部分が第3節、第4部のコラールが第4節、第5部終曲のコラールが第5節です。Bachのオラトリオ「マタイ受難曲」の再演復活を1829年3月ベルリンのジングアカデミーで成し遂げた直後だけに、この作品にはコラールの処理や旋律の動きにBachの影響が濃厚に見られ、全体の構成もテノールのソロを挿入するなどカンタータ風なのですが、ソナタ形式の第1主題呈示部（冒頭コラール）、展開部（フーガ）、緩徐楽章に当たる第2主題呈示部（テノールのアリア）とその展開部（合唱）、第1主題の再現部（第4部のコラール）、終結部（終曲コラール）という構成になっていて、決して古典様式に徹してはいないばかりか、歌詞の意味に応じて定旋律を歌うソプラノを除く他の三パートが極めて表現に富んだ動きを見せます。Mendelssohnがいかに歌詞の背景となる精神の音楽表現に細かい配慮を行ったかを見るならば、他の名曲のかげに忘れられたこの曲の輝きが見えて来るはず。例えば、このドイツ語の歌詞の朗読を想定したかのような主導的な表現の役割をバスに振り当て、「我が叫びを聞き入れ給へ」《erhör' mein Rufen》という言葉表現するのに、天の神を仰ぎ、願い求める祈りを表現して長い上昇フレーズを描いたり、「されば、イスラエルよ、行いを正せ、神の霊より生まれしものなれば」《so thu' Israel rechter Art, der aus dem Geist erzeugt ward》の部分を、イスラエルに肉声で強く呼び掛けるように、言葉を短く切って歌うなどの工夫が施されています。全体の穏やかさの陰に秘められたこのような興奮するような表現こそ、この曲の捨てがたい魅力と言えます。

当時の演奏では、終曲コラールは会衆も合唱と一緒に加わることができました。皆さんも「たとへ我らにあまたの罪有りと、神にはそれにまさる恵み有り」と心にとめて、齋藤氏のご冥福を祈りつつ、これらの曲に表現された恩寵によって死に臨んでも神の国を見ることのできる信仰を考えてみましょう。

（文責：野口 碩）

---

第 1 ステージ

1 . So gehst du nun, mein Jesu, hin,…… Gottfried August Homilius

(ソプラノ)

So gehst du nun, mein Jesu, hin,

我が君イエスよ、汝今逝かせ給はば、

(アルト・テノール・バス)

Lasset uns mitziehen,  
daß wir mit ihm sterben;

我らをも旅立たせて伴ひ給へ、  
我らもともに死なばや。

(ソプラノ)

den Tod für mich zu leiden,  
für mich, der ich ein Sünder bin,  
der dich betrübt in Freuden.

我がために死の苦しみを受けんとて、  
我がために……その我は罪人なるを、  
もろもろの快樂にて汝を悲しましめたれば。

(アルト・テノール・バス)

Lasset uns mitziehen,  
daß wir mit ihm sterben;

我らをも旅立たせて伴ひ給へ、  
我らもともに死なばや。

(ソプラノ)

Wohlan, fahr fort, du edler Hort,

いざ、連れ去り給へ、たふとき避け所の君よ、

(アルト・テノール・バス)

Lasset uns mitziehen,  
daß wir mit ihm sterben;

我らをも旅立たせて伴ひ給へ、  
我らもともに死なばや。

(ソプラノ)

mein' Augen sollen fließen ein' Tränensee  
mit Ach und Weh, dein Leiden zu begießen.

我が眼は(川と成り)流れて、涙の海に入らんとす、  
嘆きの声と悲しみとともに、  
汝の受け給ふ苦しみに注ぎかけつつ。

(ソプラノ・アルト・テノール・バス)

Lasset uns mitziehen,  
daß wir mit ihm sterben.

我らをも旅立たせて伴ひ給へ、  
我らもともに死なばや。



テノール独唱

2. Johann Sebastian Bach

Die Gesänge zu Georg Christian Schemellis Musicalischem Gesang-Buch  
ゲオルグ・クリスティアン・シェメリの音楽歌曲集のための歌曲作品

1736年ライプツィヒ(全954曲からバッハの作品のみ69曲を抜粋)

Sterbelieder 「告別の歌」

抜粋歌曲集番号56。(シェメリ歌曲集番号831) BWV439

作詞 E. Neumeister

1. (出典歌詞および原歌曲集の詞節番号)

Ach daß nicht die letzte Stunde  
meines Lebens heute schlägt!  
mich verlangt von Herzensgrunde,  
daß man mich zu Grabe trägt,  
denn ich darf den Tod nicht scheuen,  
ich bin längst mit ihm bekannt,  
führt er doch aus Wüsteneien  
mich in das gelobte Land.

あゝ我が命の今際の時よ  
今日打ち鳴ることなからんことを!  
心の底よりわれを呼び求む、  
何者かわれを墓へ運び行かんとて。  
されどなほ、われ死を恐るるに足らず、  
われ遙か前よりその声の主をよく知れり、  
彼は荒野より出でてわれを  
約束の地へ導き給へば。

6.

Gute Nacht, ihr Eitelkeiten!  
falsches Leben, gute Nacht!  
gute Nacht, ihr schnöden Zeiten!  
denn mein Abschied ist gemacht.  
Weil ich lebe, will ich sterben,  
bis die Todesstunde schlägt,  
da man mich als Gottes Erben  
durch das Grab in Himmel trägt.

さらば、汝どものいかに空しき!  
欺瞞の人生よ、さらば!  
さらば、その忌まはしき時の流れよ!  
我が訣別は為されたれば。  
われ生くる限り、死を願ふ、  
死の時が打ち鳴り、  
その場にて何者か、われを神の相続人として  
墓を経て天国へ運び去るまで。

Von der Sendung des Heiligen Geistes 「聖霊に遣はされて」

抜粋歌曲集番号30。(シェメリ歌曲集番号360) BWV462

作詞 G. C. Schemelli

1. (出典歌詞および原歌曲集の詞節番号)

Gott, wie groß ist deine Güte,  
die mein Herz auf Erden schmeckt!  
Ach! wie labt sich mein Gemüte,  
wenn mich Not und Tod erschreckt.  
Wenn mich etwas will betrüben,  
wenn mich meine Sünde preßt,  
zeigt sie von deinem Lieben,  
das mich nicht verzagen läßt.  
Drauf ich mich zufrieden stelle  
und Trotz bieten kann der Hölle.

神よ、汝の優しき御意の何と寛き事か、  
我が心にこの世にてそれを味ははせ給ふとは!  
あゝ!何とさわやかなる我が心気、  
窮苦と死のわれを脅え驚かすとき、  
何事かわれを悲しまするとき、  
おのが罪われを責むるとき、  
その罪は汝の慈愛を示し、  
われ心臆せしめらるることなし。  
それによりて、われは満ち足り、  
地獄に逆らひてたたかふを得ん。

4.

Darum bitt ich deine Güte,  
deine Gnad und Wundertreu.  
O mein Vater! mich behüte,  
daß ich nicht verlassen sei,  
Stärke mich mit deinem Geiste,  
wenn ich werde hingerafft!  
Und vor allen, was das Meiste,  
gib mir stets des Glaubens Kraft.  
Laß mich deine Liebe schmecken,  
wenn du mich wirst auferwecken.

それゆゑに、われは汝の優しき御意、  
汝の恩寵、妙なる誠実を願ひ求む。  
おゝ我が御父よ!われを守り給へ、  
われを見捨て給ふなかれ。  
汝の御意によりてわれを強め給へ、  
我が命奪ひ去られんとするとき!  
そしてとりわけ、信仰の力の最高のものを  
われに絶へず与へ給へ。  
汝の愛を味ははせ給へ、  
われを死の眠りより呼び覚まし給ふとき。

**Sterbelieder 「告別の歌」**

抜粋歌曲集番号59. (シメツリ歌曲集番号868) BWV478

作詞 J. S. Bach?

1. (出典歌詞および原歌曲集の詞節番号)

Komm süßer Tod, komm selge Ruh!  
Komm, führe mich in Friede,  
weil ich der Welt bin müde,  
ach komm! ich wart auf dich,  
komm bald und führe mich,  
drück mir die Augen zu.  
Komm selge Ruh!

来たれ、快き死よ、来たれ、至福の安息よ!  
来たれ、安らげくわれを連れ行け、  
われこの世に倦み疲れたれば、  
あゝ来たれ! われ汝を待つ、  
疾く来たりてわれを連れ行け、  
我が眼を閉じよ。  
来たれ、至福の安息よ!

2.

Komm süßer Tod, komm selge Ruh!  
im Himmel ist es besser,  
da alle Lust viel größer,  
Drum bin ich jederzeit  
schon zum Valet bereit,  
ich schließ die Augen zu.  
Komm selge Ruh!

来たれ、快き死よ、来たれ、至福の安息よ!  
天国はこの世に勝る、  
そこは遙かに大なる諸々のよろこびありて、  
それを求めてわれは、常に  
すでに訣別の備へありて、  
眼を閉ず。  
来たれ、至福の安息よ!

5.

Komm süßer Tod, komm selge Ruh!  
Ich will nun Jesum sehen  
und bei den Engeln stehen.  
Es ist nunmehr vollbracht,  
drum Welt zu guter Nacht,  
mein Augen sind schon zu.  
Komm selge Ruh!

来たれ、快き死よ、来たれ、至福の安息よ!  
われ今イエスにまみえ、  
御使ひのかたはらに立たんとす。  
今や事成りぬ、  
ゆゑに、この世はさらばなり、  
我が眼はすでに閉ぢてあり。  
来たれ、至福の安息よ!

**3. Missa secunda 「第2のミサ」** ..... Hans Leo Haßler

1. Kyrie

Kyrie eleison.  
Christe eleison.  
Kyrie eleison.

主よ、あはれみ給へ。  
キリストよ、あはれみ給へ。  
主よ、あはれみ給へ。

2. Gloria

[Gloria in excelsis Deo.] (グレゴリオ聖歌)

Et in terra pax hominibus bonae voluntatis.  
Laudamus te.  
Benedicimus te.  
Adoramus te.  
Glorificamus te.  
Gratias agimus tibi propter magnam gloriam tuam.  
Domine Deus, Rex caelestis, Deus Pater omnipotens.  
Domine Fili unigenite,  
Jesu Christe.  
Domine Deus, Agnus Dei, Filius Patris.  
Qui tollis peccata mundi, miserere nobis.  
Qui tollis peccata mundi,  
suscipe deprecationem nostram.  
Qui sedes ad dexteram Patris, miserere nobis.  
Quoniam tu solus Sanctus.  
Tu solus Dominus.  
Tu solus Altissimus, Jesu Christe.  
Cum Sancto Spiritu in gloria Dei Patris.  
Amen.

いと高き処には栄光、神にあれ。  
そして地には平和、善意の人々にあれ。  
汝をほめたたへまつる。  
汝を拝みまつる。  
汝をあがめまつる。  
汝の栄光をたたへまつる。  
汝の大なる栄光のゆゑにわれら感謝しまつる。  
神、即ち天の王、全能の御父にます神なる主よ、  
御ひとり子なる主よ、  
イエス・キリストよ。  
神にして、神の小羊、御父の御子なる主よ。  
世の罪を除き給ふ君、我らをあはれみ給へ。  
世の罪を除き給ふ君、  
我らの赦しの願ひを受け入れ給へ。  
御父の右に座し給ふ君、我らをあはれみ給へ。  
汝のみ聖なる君にませば。  
汝のみ主なり。  
汝のみいと高し、イエス・キリストよ。  
御父なる神の栄光のうちにいます聖霊とともに。  
アーメン。



### 3. Credo

[Credo in unum Deum,] (グレゴリオ聖歌)

Patrem omnipotentem,  
factorem caeli et terrae,  
visibilium omnium, et invisibilium.  
Et in unum Dominum Jesum Christum,  
Filium Dei unigenitum.  
Et ex Patre natum ante omnia saecula.  
Deum de Deo, lumen de lumine,  
Deum verum de Deo vero.  
Genitum, non factum, consubstantialem Patri:  
per quem omnia facta sunt.  
Qui propter nos homines,  
et propter nostram salutem descendit de coelis.  
Et incarnatus est de Spiritu Sancto  
ex Maria Virgine:  
Et homo factus est.  
Crucifixus etiam pro nobis:  
sub Pontio Pilato passus,  
et sepultus est.  
Et resurrexit tertia die,  
secundum Scripturas.  
Et ascendit in coelum:  
sedet ad dexteram Patris.  
Et iterum venturus est cum gloria,  
judicare vivos, et mortuos:  
cujus regni non erit finis.  
Et in Spiritum Sanctum, Dominum,  
et vivificantem:  
Qui ex Patre Filioque procedit.  
Qui cum Patre et Filio simul adoratur,  
et conglorificatur:  
qui locutus est per Prophetas.  
Et unam sanctam catholicam  
et apostolicam Ecclesiam.  
Confiteor unum baptisma  
in remissionem peccatorum.  
Et exspecto resurrectionem mortuorum.  
Et vitam venturi saeculi.  
Amen.

我は信ず、唯一の神を、  
全能の御父を、  
天と地の造り主を、  
全ての見ゆるものと見えざるものの造り主を。  
そして我らの主イエス・キリストを信ず、  
ひとり子として生まれ給ひし神の御子を。  
御父よりよろずの世の前に生まれ給ひし御子を。  
神より出でし神、光より出でし光を、  
まことの神より出でしまことの神を。  
造られずして生まれ給へる、御父と一体なる君を。  
全ての造られしものその君より成れり。  
その君我ら人類のため、  
我らの救ひのために天より降り給ふ。  
そして聖霊により受肉し給ひ、  
処女マリアより出で、  
人と成り給へり。  
我らのために十字架にさへつけられ給へり。  
すなはちポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、  
葬られ給へり。  
そして三日目によみ返り給へり、  
聖書に従ひて。  
そして天に昇り給ふ。  
即ち御父の右に座し給ふ。  
そして栄光とともに再び来たり給はんとす、  
生けるものと死せるものをさばき給ふなり。  
されば、その君の王権は止むこと無からん。  
且つ主にして、  
命を給ふ聖霊を信ず。  
そは御父より御子に現れ給ふ。  
そは御父と御子とともにあがめられ、  
たたへらるるなり。  
即ちそは預言者達により言ひ置かれし所なり。  
そして一にして聖なる公教の、  
且つ使徒継承の教会を信ず。  
我は一つのバプテスマを認む、  
罪の赦しの時に。  
そして死せる者のよみがへりを望む。  
併せて来たらんとする世の命をも。  
アーメン。

### 4. Sanctus

Sanctus, Sanctus,  
Sanctus Dominus Deus Sabaoth.  
Pleni sunt coeli, et terra gloria tua.  
Hosanna in excelsis.

聖なるかな、聖なるかな、  
聖なるかな、万軍の主なる神。  
汝の栄光天と地に満てり。  
いと高き所にホサナ（歡呼の言葉）。

### 5. Benedictus

Benedictus qui venit in nomine Domini.  
Hosanna in excelsis.

ほむべきかな、主の御名によりて来たる者。  
いと高き所にホサナ。

### 6. Agnus Dei

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:  
miserere nobis.  
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:  
dona nobis pacem.

世の罪を除き給ふ神の小羊よ。  
我らを憐れみ給へ。  
世の罪を除き給ふ神の小羊よ。  
我らに平安を与へ給へ。

---

## 第 2 ステージ

### 4 . モテット Herr, nun lässest du deinen Diener in Frieden fahren..... .....Felix Mendelssohn Bartholdy op. 69Nr. 1

|                                                 |                     |
|-------------------------------------------------|---------------------|
| Herr,                                           | 主よ、                 |
| nun lässest du deinen Diener in Frieden fahren, | 今こそ汝の僕を安らかに去らせ給へ、   |
| wie du verheißen hast.                          | 汝のかねて告げ給ひしごとく。      |
| Denn mein Auge hat deinen Heiland gesehn,       | この眼、汝の賜ひし救ひ主を見れば、   |
| den du bereitet hast vor allen Völkern,         | この君を、汝は万民のために備へ給へり、 |
| daß er ein Licht sei den Heiden,                | 異邦人の光となるべく、そして      |
| und zu Preis und Ehre deines Volkes Israel.     | 御民イスラエルの栄光と誉れのために。  |

|                                                 |                     |
|-------------------------------------------------|---------------------|
| Herr,                                           | 主よ、                 |
| nun lässest du deinen Diener in Frieden fahren, | 今こそ汝の僕を安らかに去らせ給へ、   |
| wie du verheißen hast.                          | 汝のかねて告げ給ひしごとく。      |
| Denn mein Auge hat deinen Heiland gesehn,       | この眼、汝の賜ひし救ひ主を見れば、   |
| welchen du bereitet vor allen Völkern,          | この君を、汝は万民のために備へ給へり、 |
| daß er ein Licht sei den Heiden,                | 異邦人の光となるべく、そして      |
| und zu Preis und Ehre deines Volkes Israel.     | 御民イスラエルの栄光と誉れのために。  |

|                                                 |                   |
|-------------------------------------------------|-------------------|
| Herr,                                           | 主よ、               |
| nun lässest du deinen Diener in Frieden fahren. | 今こそ汝の僕を安らかに去らせ給へ、 |

### Gloria Patri [御父に栄光あれ]

|                                            |                     |
|--------------------------------------------|---------------------|
| Ehre sei dem Vater, und dem Sohne,         | 御父と御子と              |
| und dem heiligen Geist,                    | 聖霊に栄光あれ、            |
| wie es war zu Anfang, jetzt, und immerdar, | 初めにありしごとく、今も、いつまでも、 |
| und von Ewigkeit zu Ewigkeit.              | とこしへよりとこしへまで。       |
| Amen.                                      | アーメン。               |

---



I. Choral, I. Fuge

Aus tiefer Noth schrei' ich zu dir!  
Herr Gott, erhör' mein Rufen!  
Dein' gnädig'n Ohren kehr' zu mir,  
und meiner Bitt' sie öffne!  
Denn so du willst das sehen an,  
was Sünd' und Unrecht ist gethan,  
wer kann, Herr, vor dir bleiben?

深き悩みの淵より、われ汝に向かひて叫ぶ。  
神よ、我が叫びを聞き入れ給へ。  
汝の寛き耳を我に傾け、  
そして我が願ひにその耳を開き給へ。  
かく言ふは、罪と不義の行はれし跡を  
汝つぶさに見給はば、  
誰か、主よ、御前にとどまるべき。

II. Arie mit Chor

[Bei dir nichts denn Gnad' und Gunst,  
die Sünde zu vergeben,  
es ist doch unser Thun umsonst,  
auch in dem besten Leben,  
vor dir Niemand sich' rühmen kann,  
dess' muss dich fürchten Jedermann  
und deiner Gnade leben.]

罪をゆるし給ふ  
恩寵と赦し汝に無かりせば、  
我らが行ひは有りてもなほむなし、  
最良の人生を送りてあるも、  
御前にては誰か誇る事を得べき、  
その汝を、もろびとみな畏れて、  
汝の恩寵に生きねばならず。

Darum auf Gott will hoffen ich,  
auf mein Verdienst nicht bauen,  
auf ihn mein Herz soll lassen sich (bauen)  
und seiner Güte trauen,  
die mir zusagt sein werthes Wort,  
das ist mein Trost und treuer Hort,  
dess' will ich allzeit harren.

それゆゑに、われ神を待ち望む。  
おのがいさおに拠らず、  
我が心は神の御手にまかせ、  
そのやさしき御意を信ずべし。  
そは神の尊き御言葉われに約束ありしもの、  
わが慰め、偽りなき避けどころなれば、  
その神を、われは常に待ち望む。

III. Choral

Und ob es währt bis in die Nacht,  
und wieder an den Morgen,  
doch soll mein Herz an Gottes Macht  
verzweifeln nicht, noch sorgen,  
so thu' Israel rechter Art,  
der aus dem Geist erzeuget ward,  
und seines Gott's erharre!

そして、時うつりて夜に至り、  
また朝に成らんとも、  
我が心は神の御業に望みを失はず、  
思ひ煩ふ事無からん。  
さればイスラエルよ、行ひを正せ、  
神の霊より生まれしものなれば、  
そして、おのが神の御業を待ち望め。

IV. Choral

Ob bei uns ist der Sünden viel,  
bei Gott ist viel mehr Gnade!  
Sein' Hand zu helfen hat kein Ziel,  
wie gross auch sei der Schade.  
Er ist allen der gute Hirt,  
der Israel erlösen wird aus seinen Sünden allen.

たとへ我らにあまたの罪有りとも、  
神にはそれにまさる恵み有り。  
その救ひの御手は目当てを持たず、  
たとへいかに罪の傷手は重くとも。  
神はもろびとの神にしてよき牧者なり、  
イスラエルをその全ての罪とがより救ひ給はん。

---

## PROFILE

---

### 指揮 水野克彦

オルガン 東京芸術大学卒業。ピアノを滝崎鎮代子、クラリネットを千葉国夫、室内楽を細野孝興の各氏に師事。オルガンの手ほどきを今井奈緒子氏に受ける。オルガン、通奏低音のほか、合唱指導、ピアノ伴奏、作曲と幅広く活動。現在、茗荷谷キリスト教会オルガニスト。日本オルガニスト協会会員。日本オルガン研究会会員。渋谷混声合唱団・東京三菱銀行合唱団の指揮者。

昨年まで当合唱団の常任伴奏者であったが、前指導者「齋藤明生」氏の急逝の後を引継ぎ本年1月から当合唱団の指導・指揮を担当。

### テノール 大島 博

熊本県生まれ。中央大学法学部卒業後、東京芸術大学声楽科に入学。渡辺高之助、高丈二、中山健一、原田茂生の諸氏に師事。84年安宅賞を受賞。86～88年ミュンヘン音大でE. ヘフリガー氏に学ぶ。90～91年フィッシャー・ディスカウ氏に師事。91年ベルリンフィル・ジルベスター・コンサートに出演したのを初め、日本及びヨーロッパ各地で、バッハ、モーツァルトを中心とする宗教曲のソリストとして数多くの演奏会に出演している。

近年では、94年にスロバキア的首都ブラチスラヴァにおいてP. マルテンチェクの「イエス・キリストの黙示録」の世界初演を手がけた。

95年に東京芸術大学より博士（音楽）の学位を授与。また96年からは各地でのコンサート活動に加えて、「ドイツ・リートのためのしみ」と題したレクチャーシリーズを行っている。日本女子大学非常勤講師。

---

## 東京アマデウス合唱団

- |      |                                       |
|------|---------------------------------------|
| ソプラノ | 相原芳子・大久保ルミ子・辻村順子<br>村松あおい・山形明子・山形峰子   |
| アルト  | 相澤美佐・伊藤正子・重泉秀子・鈴木寿見<br>高橋早苗・原田瀧子・宮崎米子 |
| テノール | 伊原 宏・片岡 繁・平野一郎・吉田一郎・吉田英人              |
| バス   | 楠沼 哲・塩谷栄二・橋崎誠広・野口 碩                   |
-



## 齋藤明生先生を偲んで

### 故「齋藤明生先生」の略歴

東京芸術大学卒業、同大学院終了。

芸大定期演奏会のブラームス「ドイツレクイエム」でソリストに選ばれた他在学中からベートーベン「交響曲第九番」や、多くの宗教音楽のソリストを務めた。1992年には、独ライブチヒ聖トーマス教会において、H. J. ロッチュ指揮によるカンタータ礼拝式にソリストとして出演した。

また在学中から在籍していた芸大バッハカンタータクラブでは、多年にわたり演奏委員長を務めていた。声楽を岳藤豪希、R. フィッシャー、Ph. フッテンロッハー、宇田川貞夫に、宗教音楽を小林道夫、岳藤豪希の各氏に師事。渋谷混声合唱団の指揮者のほか、東京工大の合唱団「コール・クライネス」のボイストレーナーも務めていた。

1987年から当合唱団の指導にあたっていたが、本年1月10日急逝。「享年48歳」

### 新指導者・指揮者 水野克彦

「十年続けば本物だ」、とは故齋藤明生君と私が共に師と仰ぐ方のおっしゃった言葉です。そしてまさに齋藤君と東京アマデウス合唱団との関係は十年以上続き、その間毎年演奏会を開き、さまざまな曲を取り上げて好演してきました。この事実だけで既に「十年続けば・・・」のとおり、意義と価値のある活動をしてきたと思います。

しかし、私が最近思いますが、果たして唯十年休まずに活動を続けてきたという実績のみが賞賛に値することなのだろうかということです。過去に築き上げてきた演奏実績は確かに残ります。しかし、齋藤君はどう思っていたのでしょうか。どうも彼はそのような演奏実績、つまり、何々の大曲を取り上げた、あのような熱演ができた、というようなことだけで満足していなかったように思います。彼は合唱団と一緒に何がやりたかったのでしょうか。

推測しますに、それは魂の交流というようなことだったと思います。音楽には単に美しい、心地よい、楽しい、というような体感的快楽とは次元の異なる、霊的な力、人の魂の奥深く訴えかける力があると齋藤君は認識していたはずで、彼は音楽を通して人と人との豊かな魂の交流を希望していたに違いありません。

彼が亡くなって半年、彼の思い出はいまだ鮮明に我々の心にあります。でも、あっという間の半年のような気もします。時は過ぎ去ります。それと共に彼の思い出の細部は我々の記憶から消え去ってゆくでしょう、が、その結果、逆に彼の本質、本来の姿が永続的なイメージとして我々の心に彫り刻まれてゆくのではないのでしょうか。ですから我々は、齋藤君が最も大切にしていたであろうこのことを引き継ぎ、音楽を通して「人を愛する」という一大事を学んでゆきたいと思います。

### ソリスト 大島 博

齋藤明生さんと初めて出会ったのは、もう20年以上も前の事です。当時ある合唱団でバッハの「口短調ミサ」を歌っていたのですが、練習ピアニストが急用で来られなくなり、代わりに来て下さったのが齋藤さんでした。ほとんど初見で、汗だくの伴奏でしたが、その懸命さがとても印象に残っています。芸大に入って、カンタータクラブの練習で再会した時には、なつかしくも心強く感じたものです。芸大定期で齋藤さんが歌われたブラームスの「レクイエム」のソロは、合唱席から聴いていました。大学卒業後も、共演の歌手として、また指揮者として接した齋藤さんから、多くの事を教わりました。ライブチヒの聖トーマス教会で一緒にバッハを歌った事も心に残る思い出です。齋藤さんの事を思いつつ歌う時、脳裏には、よく食べ、よく飲み、よくしゃべるあの姿が浮かびます。すると、齋藤さんが雲の上から私を支えてくれている気がして、心の中が暖かくなるのを感じるのです。



---

・大久保ルミ子(S)12年間

お酒が好きで食いしん坊で、好奇心が旺盛で音楽を愛した先生。

私達と衝突もよくありましたが、一緒に悩み、共に成長する様、心を開いて下さった。

12年の年月も今では短く思え、あまりに突然でいまだに信じられない。

・伊藤正子 (A)12年間

喜びも苦しみも共に歩んで来た12年間、先生の存在感は計り知れないものが有りました。もっと心を開いてお親しくお話をしておけばと悔やまれます。バルナバ教会の暗いベンチで一人タバコを燻らしてたお姿が何故か侘しく思い出されます。

花に埋もれた美しいお顔が忘れられません。

・野口 碩 (B)12年間

齋藤先生は、多くの合唱指導者のように解剖学的な理論を殆ど用いずに、実際のな身体の動かし方を指導する事で、トレーニングを実現する方法を知って居られた。

それが理論に適っている所に説得性があった。

・伊原 宏 (T)12年間

夢に出てきた齋藤さんは、何故かアメ車に乗っていました。天国で買い換えたのでしょうか？ 色々な車に乗っていた齋藤さんですが、思い出すのは紺のマツダです。齋藤さんの運転は、大胆でありながら極めて紳士的なものでした。トランクの中は楽譜、譜面台、キーボード、そしてテニスボールの籠やラケット、そんなもので一杯でした。

・吉田一郎 (T)12年間

先生の作為のない美声に少しでも近づきたいと願っていたが、ついに一度も褒めてくれないまま旅立ってしまった。

もう教えてもらえないし、うまい店にも行けない。この痛みは、大きい。

・宮崎米子 (A)12年間

お父さんと呼ぶ3人の息子さん、齋藤と呼ぶ昔からの多くの友人達に惜しまれて逝った齋藤先生。親子程の年齢差があっても、私にとってはいつまでも先生です。

いつかどこかで、もう一度お会いしたいと思います。

・重泉秀子 (A)12年間

私は故齋藤先生がこの合唱団を指導されて3か月後に入団し、12年間指導を受けました。先生からバッハを教わるまではと頑張って来ましたが奥が深く、まだ教わる事が沢山あるのに先生は急いで世を去ってしまいました。あまりのショックに一時は歌うことをやめようかと思いましたが、歌うことで先生を偲び、少しでも上達する事を目指して行きたいと思います。

・片岡 繁 (T)12年間

私が齋藤さんと出会って16年。それ以来一緒に飲んだり食べたりは数知れず。テニスもしたし、温泉にも行きました。もちろん合唱でも毎週会いました。残念ながらその回数が増える事は、もう無いのですね。

・辻村暎子 (S)11年間

「私の様な変なヤツと知り合った事を不幸に思いなさい」と何時も私におっしゃっていた先生…。でも、他の合唱団や個人レッスン等で誰よりも先生と接する機会が多く、色々な事を教えて頂いた私はとても幸せでした!!

---



---

・吉田英人 (T) 7年間

「あらゆる束縛を捨てた人に苦しみは存在しない」(ダンマバダ)

練習中、突然齋藤先生に「英人君、ネクタイを取り、ワイシャツのボタンを緩めなさい」と言われ、私は上半身殆ど裸の状態でご歌ってしまいました。

あの時の開放感と先生の笑顔は今でも忘れません。

先生はいつも世間の外側から私達を暖かく見守って下さっていたように思います。

・桑島加代子 (S) 7年間(休団中)

譜面への書き込みを見ると、先生のうけなかった冗談や、女性陣から鞆を買った下〇タも浮かんできます。

どれもみな大切な思い出です。

・村松あおい (S) 7年間

西早稲田、高田馬場、神楽坂。私が入団してから通った練習会場がある場所です。

今行くときと先生の顔を思い出すのでしょうかね。

永い間ご指導を有り難うございました。

・柿沼 哲 (B) 7年間

齋藤先生のソリストとしての感性が、合唱の中にいつの間にか活かされてくるのが楽しくて今まで付いてきましたが、本当に残念でたまりません。

12年間のご指導に感謝し、心からのご冥福をお祈り申し上げます。

・加藤尚子 (A) 6年間(休団中)

齋藤先生の素晴らしいバスの声が、もう聴くことが出来ないのはとても残念です。

心より御冥福を御祈り致します。

・相澤美佐 (A) 5年間

能力も性格も全く異なる団員を、共に一つの音楽を造っていく事の大変さ、楽しさを教えて頂いたと思います。今まで、有り難うございました。

・鈴木寿見 (A) 3年間

いまだに「何故? どうして?」の言葉しか出てきません。

今日はどこかの席で聴いていて下さい。そして辛口の感想を言いに現れて欲しいです。

齋藤先生、歌を有難うございました。

・高橋早苗 (A) 6か月間

私が先生にご指導頂いたのは、ごく短期間でした。

従ってあまりお話をする機会は持てませんでしたが、真夏の練習会場で黒いTシャツに汗をしたたらせて指揮をして下さったお姿を、今も鮮明に思い出します。

---

・橋本克久(B) (前団長-在小樽)

合唱団が活動を継続するには多くの困難が伴います。アマデウスが幾多の試練を経て尚今日あるのは、永年にわたる齋藤先生のご指導の賜と感謝して余りありません。

心からご冥福をお祈りしつつ、深い悲しみを超えてアマデウスの更なる発展を願って止みません。

---

(注) 東京アマデウス合唱団で齋藤先生にご指導を受けた方々に、寄稿をお願いしました。  
入団順に記載。年数は齋藤先生にご指導を受けた期間。

## 東京アマデウス合唱団のご案内

(平成12年7月現在)

---

今宵は、お忙しい中をご来場いただき、団員一同心からお礼申し上げます。

さて、すでにご存知の方々も多いかと思いますが、東京アマデウス合唱団を初めてお聴きになる方々のために、若干のご案内をさせていただきます。

東京アマデウス合唱団は、1980年に「モーツァルトのレクイエム」を自分達の手で演奏したいという夢を持つ、アマチュアの仲間達が集まって創立しました。

以来、モーツァルトのほか古典派の作品を中心とした宗教曲を、ほぼ毎年1回の定期演奏会で演奏してまいりました。

今年で20周年を迎えましたが、その間に演奏した曲の主なものを裏表紙に掲載しましたのでご覧下さい。

この合唱団は、指導者の招聘・指揮者の選定・会場設定・演奏会の曲目選定・プログラム印刷・演奏する曲目の解説から訳詞に至るまで全てが団員の労力と団員だけの資金で成り立っており、手作りの演奏会を開催するユニークな合唱団としての存在価値を、団員一同が誇りとしております。

創立当初は68名いた団員も現在は20名程度になりましたが、なんとか存続させたいという団員の強い意志に支えられて、現在に至っております。

今後の活動予定は次ページの通りですが、一緒に唄ってみたい方や興味のある方がおられましたら、是非とも練習会場にお出かけ頂いて練習状況をご覧いただきたい（見学大歓迎）と願っております。

次ページご参照の上ご来場いただきたく、団員一同心からお待ちしております。

---



## 今後の活動予定

2000年12月17日(土)

クリスマスコンサート 会場 奏楽堂(旧東京音楽学校奏楽堂)  
主な演奏曲目 1. ヨスカ・デ・プル、ルストリーナ、ライクリア等のアヴェ・マリア  
2. バッハの待降節と降誕祭のコラール、他

2001年10月～11月

第20回定期演奏会 会場 石橋メモリアルホールを予定  
主な演奏曲目 モーツァルト：三位一体の主日のミサ K167

2002年春 小演奏会 会場及び主な演奏曲目等 未定

2002年秋

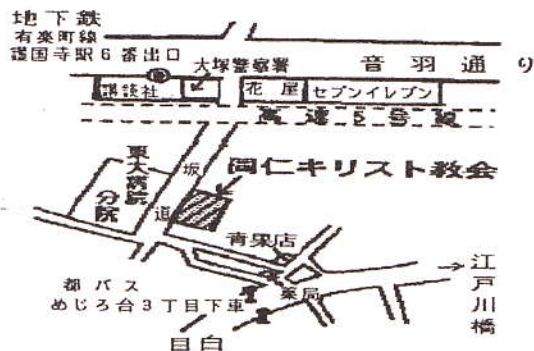
第21回定期演奏会 会場 石橋メモリアルホールを予定  
主な演奏曲目 バッハ：ミサ曲 イ長調 BWV234

### (参加・見学ご希望の方へ)

お問い合わせ先 辻村順子 048-476-4056  
大久保ルミ子 03-3960-7714

- 毎週水曜日 午後6時30分～9時
- 練習会場 同仁キリスト教会美登里幼稚園2F
- 指導者 水野克彦先生
- 会費 月額4,000円(学生3,000円)

練習場所案内図(同仁キリスト教会美登里幼稚園2F)



- 地下鉄有楽町線「護国寺」下車6番出口から徒歩5分、又は
- JR山手線目白駅から、都バス「樽山荘」又は「新宿西口」行きで「目白台三丁目」下車、徒歩5分

|                |             |                                   |
|----------------|-------------|-----------------------------------|
| 1981 February  | Mozart      | :RÉQUIEM                          |
| 1981 November  | Händel      | :MESSIAH                          |
| 1982 November  | Fauré       | :RÉQUIEM                          |
| 1983 September | Mozart      | :KRÖNUNGS MESSE                   |
| 1984 September | Mozart      | :RÉQUIEM                          |
| 1985 October   | Bach        | :KANTATE Nr.106                   |
| 1986 October   | Mozart      | :GROSSE MESSE                     |
| 1987 October   | Schütz      | :MUSIKALISCHE EXEQUIEN            |
| 1988 December  | Mozart      | :VESPERAE                         |
| 1989 November  | Mozart      | :RÉQUIEM                          |
| 1991 February  | Mozart      | :LITANIAE                         |
| 1991 November  | Mozart      | :DOMINICUS MESSE                  |
| 1992 Nov.      | Charpentier | :MESSE DE MINUIT POUR NOËL        |
| 1993 November  | Mozart      | :MISSA BREVIS                     |
| 1994 November  | Mozart      | :RÉQUIEM (LAST CONCERT)           |
| 1995 October   | Bach        | :KANTATE Nr.182                   |
| 1996 November  | Mozart      | :VESPERAE                         |
| 1997 October   | Mozart      | :MISSA SOLEMNIS                   |
| 1998 October   | Bach        | :KANTATE Nr.61                    |
| 1999 Oct.      | Rheinberger | :STABAT MATER                     |
| 2000 July      | Mendelssohn | :AUS TIEFER NOTSCHREI' ICH ZU DIR |